あかね

あかねさす　昼は物思ひ　ぬば玉の
夜はすがらに　哭のみし泣かゆ

中臣宅守
（15・三七三二）

（訳）（アカネさす）昼は昼で物思いに沈み（ぬば玉の）夜は夜通し泣けてならない。
（用字）茜・茜草・赤根・安可禰。
（和名）あかね――あかね科。
（産地）本州・四国・九州。
（用途）根を赤色染料とした

あきのか（まつたけ）

芳を詠める

高松の　この峯も狭に　笠立てて
盈ち盛りたる　秋の香のよさ

（10・二二三三）

（訳）奈良の高円山のこの峰も狭いほどに、笠を立てて、一面に生えているアキノカの香りのよさよ。
（用字）秋香
（和名）まつたけ――まつたけ科
（産地）本州の赤松林
（用途）香りのよい食用きのこ。当園では栽培不可

あ　さ

麻衣　著ればなつかし　紀の国の
妹背の山に　麻蒔く吾妹

藤原　卿
（7・一一九五）

（訳）アサ衣を身につけると、紀の国の妹背山に麻をまいていた吾妹が思われてならない。
（用字）麻・安佐・朝
（和名）あさ――くわ科
（産地）栽植（原産・中央アジア）
（用途）衣服の重要材料とした　法律で規制されているため当園では栽培不可

あさがほ（ききょう）

朝顔は　あさつゆ負いて　咲くといへど
夕陰にこそ　咲きまさりけれ

（10・二一〇四）

（訳）アサガオは朝露をうけて咲くというが、夕方の光の中でこそ、盛んに咲いているのだなあ。
（用字）朝顔・朝貌・阿佐加保・朝杲・槿
（和名）ききょう――ききょう科
（産地）北海道・本州・四国・九州
（用途）根を薬用とした（鎮咳・たんとり）

あし

若の浦に　潮満ちくれば　潟を無み
葦辺をさして　鶴鳴き渡る

山部赤人
（6・九一九）

（訳）　若の浦に、潮が満ちてくると、潟が消えてしまうので、アシの生えている方に鶴が鳴きながら移ってゆく。

（用字）葦・蘆・葭・安之。
（和名）あし――かほん科。
（産地）本州・四国・九州。
（用途）あし垣・あしすだれ・あし火など生活に深い関係があった

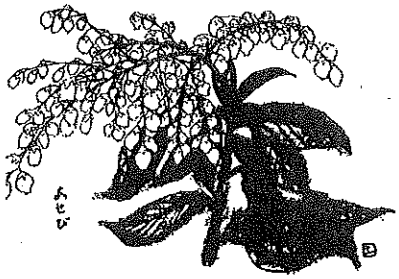
あしび（あせび）

磯の上に　生ふる馬酔木を　手折らめど
見すべき君が　ありといはなくに

大来（伯）皇女
（2・一六六）

（訳）　池のほとりに生えているアシビを手折ろうとはしたがこれを差上げる弟はすでにこの世にいないのに。

（用字）馬酔・馬酔木・安之婢・安志妣
（和名）あしび・あせび――つつじ科
（産地）本州・四国・九州
（用途）有毒植物で薬用として（害虫駆除に用いた民間薬）



あぢさゐ（あじさい）

紫陽花の　八重咲く如く　やつ世にを
いませわが夫子　見つつしのはむ

橘諸兄
（20・四四四八）

（訳）アジサイの八重に咲くようにいつまでも栄えておいで下さい。私はそれを見仰いでほめたたえよう。

（用字）紫陽花・安治佐為・味狭藍。
（和名）あじさい――ゆきのした科。
（産地）がくあじさいから変化・栽植。
（用途）花を煎用し、古来こぶ取りの特効薬とした（民間薬）

あづさ（よぐそみねばり）

梓弓　春山近く　家居して
續ぎて聞くらむ　うぐひすの声

（10・一八二九）

（訳）（アズサ弓）春の山近くに住んでいるのでこれからは、しょっちゅうぐいすの声を聞くだろうよ。

（用字）梓・安都佐。
（和名）よぐそみねばり・みずめ――かばのき科。
（産地）本州・四国・九州。
（用途）材で弓・槍柄につかう

あは（あわ）

足柄の　箱根の山に　粟まきて
実とはなれるを　逢はなくもあやし

東歌
（14・三三六四）

（訳）　足柄の箱根の山に播いたアワが実のったように、私たちの恋が成就したのに、逢えないというのは、ふにおちないことである。

（用字）安波・粟。
（和名）あわ――かほん科。
（産地）栽植。
（用途）五穀の一種で重要な食用とした

あふち（せんだん）

妹が見し　楝の花は　散りぬべし
わが泣く涙　いまだ干なくに

山上憶良
（5・七九八）

（訳）　あなたが見たアオチの花はもう散るだろう。そんなに日がたったというのに、私の涙は一向に乾きそうもない。

（用字）楝・阿布知・安布知・安不知・相市。
（和名）せんだん――せんだん科。
（産地）四国・九州。
（用途）果実は苦楝子といって薬用とした

あふひ（ふゆあおい）

梨なつめ　黍に粟嗣ぎ　延ふくずの
後も逢はむと　葵花咲く

（16・三八三四）

（訳）梨に棗、黍に粟が続くというように続いて君に会い、葛のつるが一旦わかれて後でまた逢うように、後にでも逢おうと思うが、そのアウに縁のあるアオイの花が咲いている。

（用字）葵
（和名）ふゆあおい・かんあおい――あおい科
（産地）アジア原産
（用途）蔬菜として、広く用いられた

あべたちばな（くねんぼう）

吾妹子に　逢はず久しも　甘美物
阿部橘の　蘿生すまでに

（11・二七五〇）

（訳）いとしい彼女に逢わないで久しくなった。（うましもの）アベタチバナの木に苔が生えるほど長く。

（用字）阿部橘。
（和名）こうじみかん・たちばな――さんしょう科
（産地）四国・九川州。
（用途）果実を食用とした

あやめぐさ（しょうぶ）

ほととぎす　待てど来なかず　菖蒲草
玉にぬく日を　いまだ遠みか

大伴家持
（8・一四九〇）

（訳）　ほととぎすを待っているが、いまだにやって来ない。アヤメグサを珠として紐の緒に通す日がまだまだのためだろうか。

（用字）菖蒲草・安夜売具佐・安夜女具佐。

（和名）しょうぶ――さといも科。

（産地）北海道・本州・四国・九州。

（用途）根を薬用にした　（健胃薬・浴湯料）

あをな（かぶ）

食薦敷き　蔓菁煮持ち来　梁に
行騰懸けて　息むこの君

長忌寸意吉麻呂
（16・三八二五）

（訳）　すこもを敷いてアオナを持って来なさい。梁にむかばきをかけて休んでいるこの方へ。

（用字）蔓菁。

（和名）かぶら――あぶらな科。

（産地）栽植。

（用途）日常の蔬菜として重要なものとした

いちし（えごのき）

路の辺の　壱師の花の　灼然く
人皆知りぬ　わが恋妻は

（11・二四八〇）

（訳）　道ぞいのイチシの花のように、はっきりと、誰でも知るようになった。私の恋しい妻を。

（用字）壱師。

（和名）えごのき――えごのき科。

（産地）本州・四国・九州。

（用途）生の果皮をすりつぶして、川に流し魚をマヒさせてとるのに用いた。材を傘のろくろに使用した

いちし（ひがんばな）

路の辺の　壱師の花の　灼然く
人皆知りぬ　我が恋妻は

（11・二四八〇）

（訳）　道ぞいのイチシの花のように、はっきりと、誰でも知るようになった。私の恋しい妻を。

（用字）壱師。

（和名）ひがんばな――ひがんばな科。

（産地）本州・四国・九州。

（用途）有毒植物の一種。この鱗茎をさらして、でん粉をとり、食用にすることがある

いちし（くさいちご）

路の辺の　壱師の花の　いちじろく
人皆知りぬ　わが恋妻は

（11・二四八〇）

（訳）道ぞいのイチシの花のように、はっきりと誰でも知るようになった。私の恋しい妻を。
（用字）壱師）。
（和名）くさいちご――いばら科。
（産地）本州・四国・九州。
（用途）果実を食用とした。

いちひ（いちいがし）

愛子汝夫の君……
あしひきのこの片山に　二つ立つ
櫟が本に梓弓……

（16・三八八五）

（訳）長歌の一部に付き省略。
（用字）櫟・伊智比。
（和名）いちいがし――ぶな科。
（産地）本州・四国・九州。
（用途）実は食用とし、材は建築・器具に使用

い　ね

稲舂けば　かがる我が手を　今宵もか
殿の若子が　取りて嘆かむ

東歌
（14・三四五九）

（訳）イネをつくと手が荒れて、あかぎれする私の手を、今夜もまた、お邸の若様がお取りになって嘆くことであろうよ。

（用字）稲・伊禰。
（和名）いね――かほん料。
（産地）日本全国栽植。
（用途）食料生活の第一で農耕生活の主とした

いはづな（ていかかずら）(正)

石綱の　また変苦かへり　あをによし
奈良の都を　また見なむかも

（6・一〇四六）

（訳）（イワヅナのように）また若返って、奈良の都を再び見ることができるだろうか。

（用字）石綱。(正)
（和名）ていかかずら――きょうちくとう科。
（産地）本州・四国・九州。

いはゐづら（すべりひゆ）

入間道の　大家が原の　いはゐ蔓
引かばぬるぬる　吾にな絶えそね

東　歌
（14・三三七八）

（訳）　武蔵の入間路の大家の原に生えているイワイヅラが引張るとずるずる抜けるように、私との間がきれてしまわないようにして下さいよ。

（用字）伊波為都良。
（和名）すべりひゆ――すべりひゆ科。
（産地）北海道・本州・四国・九州。
（用途）葉茎をゆでて食用とした

うきまなご（うきくさ）

解衣の　恋ひ乱れつつ　浮沙
生きても吾は　あり渡るかも

（11・二五〇四）

（訳）（解衣の）乱れるように、恋心乱れ、水に浮く砂のように、はかなく生きて、ながらえ生きている私であるよ。

（用字）浮沙。
（和名）うきくさ――うきくさ科。
（産地）北海道・本州・四国・九州。

うけら（おけら）

恋しけば　袖も振らむと　武蔵野の
うけらが花の　色に出なゆめ

東歌

（14・三三七六）

（訳）　恋しいなら、私が袖を振ろうものを、（武蔵野のウケラが花）のように決して恋心を顔色に出しては、いけないよ。

（用字）宇家良・山薊・朮

（和名）おけら――きく科

（産地）本州・四国・九州

（用途）若苗を食用とした　根塊を乾燥し薬用とした（健胃薬）

うのはな（うつぎ）

ほととぎす　鳴く声聞くや　卯の花の
咲き散る岡に　田草引く乙女

（10・一九四二）

（訳）　ほととぎすの啼く声を聞いたかね。ウノハナの咲いては散る岡で、クズを引いている乙女よ。

（用字）宇能波奈・千花・宇花

（和名）うつぎ・うのはな――ゆきのした科

（産地）本州・四国・九州

（用途）材を木釘を作る

うはぎ（よめな）

春日野に　煙立つ見ゆ　娘子等し
春野の菟芽子　採みて煮らしも

（10・一八七九）

（訳）　春日野に煙が立っている。少女たちが、春の野に出てウハギを摘んで煮ているらしいよ。

（用字）菟芽子・宇波疑

（和名）よめな――きく科

（産地）北海道・本州・四国・九州

（用途）春の摘み草の代表で、食用とし、秋はのぎくの代表とされた。

うまら（のいばら）

道の辺の　荊の末に　はほ豆の
からまる君を　離れか行かむ

上総国　防人
（20・四三五二）

（訳）　道わきのウマラの先に、まきついているやぶまめのように、取りつく彼女に別れて行くのであろうか。

（用字）荊・宇万良

（和名）のばら・のいばら――ばら科

（産地）本州・四国・九州

（用途）偽果は落葉後も残り、営実といい、薬用とした。

う　め

袖垂れて　いざわが苑に　うぐひすの
木傳い散らす　梅の花見に

藤原　永手
（19・四二七七）

（訳）長い袖を垂れて、さあ私の庭においで下さい。うぐいすが、枝渡りして散らすウメの花を見るために。

（用字）梅・宇米・有米・干梅
宇梅・汗米・鳥梅

（和名）うめ――ばら科

（産地）九州は自生・他は栽植

（用途）果実を食用・薬用（蛔虫駆除・解熱・鎮咳・鎮嘔薬）とした

う　も（さといも）

蓮葉は　斯くこそあるもの
意吉麻呂が　家なるものは　芋の葉にあらし

（16・三八二六）

（訳）蓮の葉というものは、このようなものである。意吉麻呂の家にあるのは、似て非なるウモの葉であるらしい。

（用字）宇毛・芋

（和名）さといも――さといも科

（産地）栽培植物（原産・インド）

（用途）栽培して球茎・葉柄を食用とした

う　り（まくわうり）

瓜食めば　子等思ほゆ
栗食めば　況してしぬばゆ
何処より　来りしものぞ
眼交に　もとな懸りて　安寝し為さぬ

山上の憶良（五・八〇二）

（訳）ウリを食べると、わが子のことが思い出される。子どもというものは一体どこから来たのかしら。目の前に心もとなくちらついて床に入っても安眠できない。

（用字）瓜
（和名）まくわうり――ウリ科
（産地）栽植
（用途）おいしい果物とした

え（えのき）

わが門の　榎の実もり喫む　百千鳥
千鳥は来れど　君ぞ来まさぬ

（16・三八七二）

（訳）私の家の門口のエの木の実を、ついばんでたべている沢山の鳥。沢山の鳥がこのように来るが、待っているあなたはおいでにならない。

（用字）榎
（和名）えのき――にれ科
（産地）栽植（原産・印度）
（用途）小球形の果実は甘味があって食用となり小鳥の類が好んでこれをついばむ

おほゐぐさ（ふとい）

上毛野　伊奈良の沼の　大藺草
よそに見しよは　今こそ勝れ

（14・三四一七）

（訳）上野国の伊奈良の沼のオオイグサのように（刈りに行かず）傍でみていた時よりは（逢った後の）今こそ恋しさがまさるのに。

（用字）於保為具佐

（和名）ふとい――かやつりぐさ科

（産地）北海道・本州・四国・九州

（用途）栽培して茎を刈りとり、むしろやござを織った。

おみのき（もみ）

……み湯の上の　樹群をみれば
臣の木も　生ひ継ぎにけり

山部赤人
（3・三二二）

（訳）……温泉のほとりの樹林を見れば、オミノキも昔のように生い継いでいる。

（用字）臣木

（和名）もみ――まつ科

（産地）本州・四国・九州

（用途）材は建築・他種々に使用

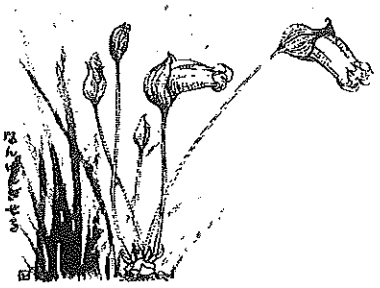
おもいぐさ（なんばんぎせる）

道の辺の　尾花が下の　思草
今さらになど　物か念はむ

（10・二二七〇）

（訳）（路傍のすすきの根元に寄生するオモイグサ）今さら恋の思いに苦しみ悩もうか。

（用字）思草
（和名）なんばんぎせる——はまうつぼ科
（産地）本州・四国・九州
（特徴）すすき・さとうきびなどに寄生する草。



かきつばた

吾のみや　かく恋すらむ　杜若
丹つらふ妹は　いかにかあらむ

（10・一九八六）

（訳）私だけがこんなに片思いしているのであろうか。面だちの美しい彼女はどんな気持かしら。

（用字）杜若・垣津幡・垣津旗・垣幡・加吉都幡多
（和名）かきつばた——あやめ科
（産地）北海道・本州
（用途）花を染料にも用いた

かし

静まりし　浦浪さわく　わが背子が
い立たせりけむ　いつ橿が本

額田王
（1・九）

（訳）　凪いでいた海辺の波がさわがしくなってきた。いとしいあの人が立っていたイツカシのあたりの。

（用字）橿

（和字）かし・あらがし――ぶな科

（産地）本州・四国・九州

（用途）果実は食用とした。材は建築

かしは（かしわ）

稲見野の　あから柏は　時はあれど
君を吾が思う　時はさね無し

安宿の王
（20・四三〇一）

（訳）　稲見野のアカラガシワは、時節はきまっているが、君を思う私の気持は、時節の区別はなく、いつも思いが絶えない。

（用字）柏・我之波

（和名）かしわ――ぶな科

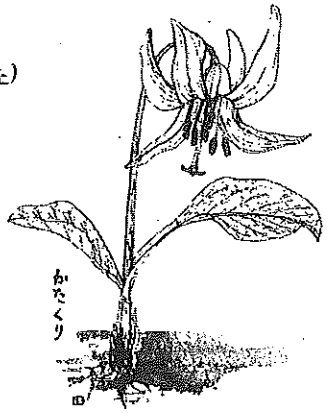
（産地）北海道・本州・四国・九州

（用途）樹皮は染料とした。葉は食物を盛る器に用いた。

かたかご（かたくり）

もののふの　八十をとめ等が　挹み乱ふ
寺井の上の　堅香子の花

大伴の家持（19・四一四三）



（訳）（物部の）おお~~せ~~ぜ（正）いの乙女たちが賑やかに汲んでいる寺井のほとりに咲くカタカゴの花の可憐な姿よ。

（用字）堅香子

（和名）かたくり――ユリ科

（産地）北海道・本州

（用途）根茎からかたくり粉を作り食用とした

かづのき（ぬるで）

足柄の　吾を可鶏山の　穀の木の
我をかすさねも　かづさかずとも

（14・三四三二）

（訳）足柄の可鶏山のカズノキではないが、私をさそって下さいな。カズノキをさかないでも。

（用字）可頭乃木

（和名）ぬるで――うるし科

（産地）北海道・本州・四国・九州

（用途）樹皮は染料や塗料に用いられた

かつら

黄葉する　時になるらし　月人の
かつらの枝の　色づく見れば

（10・二二〇二）

（訳）　地上の木々の色づく秋になったようである。月世界のカツラが色づいて月の光を増してきたのをみると。

（用字）楓

（和名）かつら――かつら科

（産地）北海道・本州・四国・九州。

かには（ちょうじざくら）

……敷細の　枕も纏かず　桜皮纏き
作れる舟に　真楫貫き　吾が榜ぎ来れば……

山部　赤人

（6・九四二）

（訳）　（敷細の）枕もせず、カニワを巻いて造った舟に、楫をつけて漕いでくると……

（用字）桜皮

（和名）ちょうじざくら――ばら科

（産地）本州

（用途）樹皮は細工ものをまく料